

## <動向>

# 難民問題への本学の取り組み —2018 年度—

打 樋 啓 史

本年度も昨年度までと同様、諸団体、関係者、ボランティアの方々のご理解とご協力のもとで、本学における「難民問題」の啓発に向けての取り組みを継続することができた。今年度から本学におけるこの活動の事務局が再び人権教育研究室に置かれたことを受け、同研究室委員であり、人権担当学長補佐としてその窓口を務めることになった小職から、ご協力をいただいた方々に改めて感謝を申し上げますと共に、本年度本学で実施された取り組みならびに本学と関係する事柄の概要を記すこととする。

最初に、昨年度は諸事情で開催が叶わなかった「Meal for Refugees (以下 M4R と記す)」を、今年度は 11 月に神戸三田キャンパスと西宮上ヶ原キャンパスで実施することができた。これは、学生食堂のメニューに日本で暮らす難民の祖国の料理を導入し、その売り上げの一部 (1 食につき 20 円または 10 円) を「特定 NPO 法人 難民支援協会 (以下 JAR と記す)」に寄付して日本で暮らす難民支援に用いるという企画で、学生たちが食を通じて難民問題を知り、それを身近にとらえることを狙いとするイベントである。本学では 2012 年度から難民推薦制度を通じて入学した学生が中心となって JAR の協力のもと始められ、これが全国の大学では初の実施となった。今年度の再開については昨年度より相談が始められていたが、6 月から神戸三田キャンパスでは従来のとおり難民支援サークル「J-FUN ユース K.G.」の

学生たちが中心となって準備が始まった。西宮上ヶ原キャンパスでは、後述するとおり 6 月 11 日 (火) に JAR 広報部の福原智美氏を社会学部開講科目のゲストスピーカーとしてお招きした際に、講義内での福原氏からの呼びかけに数名の学生が手を挙げ、これらの社会学部生らを中心に有志 11 名が「K.G. Meal for Refugees @上ヶ原」というチームを作り、準備が開始された。

これら学生チームの主催、人権教育研究室の後援、関西学院大学生生活協同組合の協力という体制で、学長室や広報室などの理解とサポートも得ながら全学的な支援のもとでの実施が可能となった。とりわけ、大学生協から西宮上ヶ原キャンパスではフードサービス事業部の佐々木満部長、神戸三田キャンパスでは神戸三田キャンパス事業部の新井豊課長がこの窓口になられ、メニュー選定、試食会、広報、売上集計など、その都度学生たちの相談に乗られつつ、準備から実施後まで丁寧に対応してくださった。また西宮上ヶ原キャンパスでは、準備の一環として、9 月 26 日 (水) に学生チームが 2012 年度に本学での M4R の発起人となった卒業生のテュアン・シャンカイ氏 (ミャンマー出身) を招き、難民問題と M4R についての勉強会を行なった。以下が今年度の M4R の概要である。

・西宮上ヶ原キャンパス

期 間：11 月 19 日 (月) - 22 日 (木)

場 所：BIG PAPA、BIG MAMA

メニュー：エッグカレー（月、火）、さっぱり味のカラフルサラダ（全日）、スパイシービーフプレート（水、木）、パンプディング（全日）

・神戸三田キャンパス

期 間：11月19日（月）－22日（木）

場 所：第1厚生棟 LunchBox

メニュー：まるやかチキンカレー（全日）、豚肉のガラムマサラ炒め（月、水）、鶏肉とジャガイモのスパイス煮込み（火、木）

寄付額の総計は、西宮上ヶ原キャンパスでは14,720円（736食）、神戸三田キャンパスでは7,720円（543食）となり、各チームからJARに届けられた。また神戸三田キャンパスでのM4Rについては、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞から取材を受け、各紙に記事が掲載された。このように学生が主体となって難民問題に取り組むことの意義はたいへん大きく、次年度の継続に向けても相談が始められている。

一方、2016年度から全国初の高校生によるM4Rを開始した本学院の高等部では、今年度は第3回目となるM4Rが実施された。これまで同様グローバル・リーダー・プログラムに参加している3年生が中心となって、JARならびに大学生協フードサービス事業部の協力のもと準備が進められ、「世界難民の日（6/20）」に合わせた6月18日（月）から22日（金）の5日間、高中部食堂にて行われた。今回は「知る 食べる 支える」をスローガンとして、「鶏肉と野菜の甘辛丼（スリランカ）」と「レーズンのパンプディング（パキスタン）」が特別メニューとして提供された（関西学院高等部ホームページ参照）。

授業に関しては、今年度も、西宮上ヶ原キャンパスで開講の全学共通科目「『関学』学1」（春学期）と「『関学』学2」（秋学期）で、それぞれ講義の

一回を、難民問題を主題にしてゲストスピーカーをお招きして開講した。春学期は5月28日（月）に野津美由紀氏（JAR広報部コーディネーター）を、秋学期は10月19日（月）に吉山昌氏（JAR事務局長）をお招きすることができた。また、これら両日の午前中には、経済学部との協力を得て両ゲストスピーカーに経済学部チャペルで学生たちへのメッセージを語っていただく機会が与えられた。授業としてはこの他にも、西宮上ヶ原キャンパスで、社会学部開講科目「キリスト教と文化」（春学期）の6月11日（火）の講義を、難民問題を主題として福原智美氏（JAR広報部）をゲストスピーカーにお招きして開講し、難民問題の現状についてお話いただき、その中で難民問題と宗教との関わりについても触れていただくことができた。上述のとおり、福原氏によるこの講義の際にM4Rの呼びかけがなされ、それに応える学生たちが出てきたという次第である。

また今年度も、本学在学学生による要望と協力の申し出によって2014年度から始められた「UNHCR 難民映画祭」への参加が行なわれた。これは、2016年度から始まった新たな協力体制である「学校パートナーズ」としての映画上映会であり、西村愛子氏（UNHCR駐日事務所渉外アシリエイト）をはじめ国連UNHCR協会の方々のご助言とご協力のもと、西宮上ヶ原と神戸三田の2キャンパスにて上記のM4Rの期間と合わせて実施することができた。概要は下記のとおりで、詳細は国連UNHCR協会のホームページに他校の実施報告と共に掲載されている。

「UNHCR 難民映画祭 2018 - 学校パートナーズ上映」

主 催：関西学院大学人権教育研究室

後 援：UNHCR駐日事務所、国連UNHCR協会

【西宮上ヶ原キャンパス開催】

日 時：11月19日（月）16：50－18：30

場 所：関西学院会館「光の間」

務官事務所（UNHCR）駐日事務所  
による共催

【神戸三田キャンパス開催】

日 時：11月22日（木）15：10 - 16：40

場 所：VI号館101号教室

上映作品：『アイ・アム・ロヒンギャ（I am  
Rohingya: A Genocide in Four Acts）』

監督：ユスフ・ズィーネ（カナダ／2018  
年／90分／ドキュメンタリー）

言語：（音声）英語、ロヒンギャ語  
（字幕）日本語、英語

この作品は、ミャンマーからバングラデシュに命がけで避難し、やがてカナダに定住したロヒンギャの若者たちが、演劇を通じて、自身の経験、トラウマ、アイデンティティに向き合う姿を映し出したもので、日本では十分にその現状が知られていない「ロヒンギャ問題」の悲劇性と実際にその現実を背負いつつ前に進もうとする人々の姿をリアルに伝えるものであった。上映においては、西宮上ヶ原キャンパスでは約170名、神戸三田キャンパスでは約420名という多くの視聴者の参加を得ることができた。

この他に、学外で開催された難民高等教育支援に関するシンポジウムに、元人権教育研究室室長で、長年本学での難民問題についての啓発活動の窓口となってきた舟木讓経済学部教授が参加し、本学での難民高等教育プログラム導入の経緯とこれまでの取り組みに関してパネリストの一人として報告を行い、質疑応答に答えた。概要は以下の通りである。

主 題：難民高等教育支援を考える：日本の  
モデルと今後の課題

日 時：12月1日（土） - 2日（日）

場 所：国際文化会館（東京都港区）

主 催：国際基督教大学・日本国際基督教大  
学財団（JICUF）、国連難民高等弁

なお、2018年度は難民高等教育プログラムによる本学への入学者数が、2007年度の開始以降初めて「0」になったが、2019年度は全国で12名の入学者が決定し、本学にも国際学部への入学者が1名得られ、入学の準備が進んでいる。また上記のシンポジウムでも課題となったことであるが、日本以外で難民認定を受けた学生を「留学生」として受け入れる可能性が考慮されており、本学でも検討を始める必要性が出てきている。

日本でも多くの人々によって難民問題に関する啓発活動およびその理解と協力に向けての努力が続けられている一方で、日本における難民受け入れは未だ進んでいない現状がある。法務局入国管理局による2018年2月13日の報道発表によると、2017年の日本での難民認定申請者は19,628名であり、これは前年に比べ8,727名増で、過去最多であった。しかしながら、同年の難民認定者は20名に留まっており、前年比8名減となっている（なお、難民認定されなかったが人道的配慮を理由に在留を認められた者が45名）。また、国際世論も、無関心や道徳的無知によって「難民の悲劇に対する麻痺状態」に近づいていることが指摘される（Z. バウマン『自分と違った人たちとどう向き合うか－難民問題から考える』、青土社2017年）。このような中で、本学における難民問題への取り組みは本当に小さな働きであるが、それを多くの方々のご協力とご理解によって今年度も継続できたことに心より感謝して、次年度以降もこの働きを地道に続けていくことの大切さを心に刻みつつ、今回の報告とさせていただきます。